
星の花

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の花

【Nコード】

N2203S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

朝の女神が好きになってしまった夜の神。その神様が考えた贈りものとは。ファンタジー系の童話です。

第一章

星の花

夜の神はこの時とても悩んでいました。

何を悩んでいたかという事です。恋をしていたのです。

彼が好きなのは朝の女神です。輝やかんばかりに美しいその女神にです。恋心を抱いていたのです。

それで何とか彼女を振り向かせたいと考えていました。しかしです。

「どうしたらいいのだろう」

それがわからないのでした。

「一体どうしたら朝の女神は振り向いてくれるのかな」

こう考えていたからです。いつも彼と一緒にいる梟が彼に言ってきました。梟は夜の鳥なので彼に仕えているのです。だから一緒にいるのです。

梟は大きな丸い目を動かしながらです。夜の神に言いました。

「それならですね」

「何かいい考えがあるのかい？」

「贈り物はどうですか？」

夜の神にこれを勧めるのでした。

「それを贈れば女神様も振り向いてくれますよ」

「贈り物をかい」

「はい、どうですかこれは」

あらためて夜の神に言います。

「悪い考えじゃないと思いますけれど」

「そうだね」

夜の神も梟のその言葉に見るべきものを見出しました。

「そしてその時に好きだって言えば」

「ええ、かなりいいとおもいますよ」

「よし、決めたよ」

夜の神は梟の言葉を受けることにしました。

そうしてそのうえで、です。梟にさらに尋ねるのですた。

「それならだけれど」

「はい、それなら」

「何を贈ればいいかな」

贈り物をするとなればです。次に考えたのは何を贈るかでした。

梟に対してこのことを尋ねたのです。尋ねずに入られませんでした。

「朝の女神に。何を」

「そうですね。綺麗なものがいいですね」

「綺麗なもの？」

「女の人っていうのは綺麗なものが好きですから」

だからだということです。

「ですから。それを」

「綺麗なものかい」

「それに女神様が持っていないものですね」

梟はこんなことも言いました。

「その二つの条件が合さっているものなんてどうですか？」

「綺麗で。そして」

「はい、女神様が持っていないようなものです」

「うっん、そんなのがあるのかな」

「あると思いますよ」60

梟は腕を組んで考える顔になった夜の神に対してまた言いました。

「だって何でも持っているのって」

「いないっていうのかい？」

「神様でもそんな方いないじゃないですか」

「そういえばそうだね」

「誰でも何かを持っていて何かを持っていないんですよ」

梟は夜の神の前で話します。

「だからですね」

「うつん、そうは言っても」

「あとは」

「あとは？」

「夜の神様が持っているものなら話は簡単ですよ」
「今度はこのことを指摘するのです」

「そういうものなら」

「僕が持っているものかい？」

「色々持つてるじゃないですか」

梟はこう自分が仕えている神に話します。

「それこそ」

「そうかな。僕が持っているのは夜の中だけのことだよ」

けれどです。夜の神はここで暗い顔になりました。

そしてそのうえで。言葉まで暗くさせてこう梟に話します。

「夜は暗いし。朝と違って」

「朝と比べたら何もありませんか」

「朝みたいに眩しいかい？あんな輝かしいものがあるかい？」

「それはないですね」

梟もこのことはこう言うしかありませんでした。違つと言えば嘘になるからです。

「それは」

「じゃあ何があるんだい」

夜の神は梟のその言葉にさらに困った顔になりました。

第二章

「それじゃあ」

「けれど輝くものはあるじゃないですか」

「夜にかい？」

「はい、ありますよ」

「それはあるとです。主に言うのでした。」

「ちゃんと」

「何があるんだい、一体」

「まず月があるじゃないですか」

「最初に出したのはそれでした。」

「月が」

「月かい」

「あの光もいいじゃないですか。とても綺麗で」

「けれどあれは月の女神のものじゃないか」

「夜の神は項垂れて梟に言い返しました。」

「そうだろ？だからあれは」

「ええ、そうですね」

「何だ、わかってるじゃないか」

「他にもあるじゃないですか」

「梟はまだ言います。」

「ちゃんと」

「あるって」

「夜空に他には何がありますか？」

「こゝ夜の神に尋ねます。」

「お月様の他には」

「ええと、月の他には」

「月の他に輝くものですよ」

「ああ、それなら」

こう言われてです。夜の神も気づきました。それは。

「星だね」

「はい、星がありますよね」

「それも一杯ね」

「色も様々ですしいつも輝いていますし」

「じゃあそれを贈れっていうんだね」

「はい」

まさにその通りだと。梟は言いました。

「それでどうですか？」

「よし、そうだね」

夜の神の声も強いものになっていました。

「それじゃあその星を一杯集めて」

「そして贈るんですよ」

「そうしようか。ただ」

「ただ？」

「思っただけどね」

ここでまた弱気な顔を見せる夜の神でした。そうして梟に対して言います。

「そのまま贈っても駄目なんじゃないかな」

「星達をですか」

「少し芸がないんじゃないかな」

こう言うのです。

「それは」

「駄目ですか」

「うっん、印象が弱いっていうか」

これが夜の神の考えでした。

「そう思っただけどね」

「そうですね。私は充分だと思いますけれど」

「いや、弱いよ」

夜の神はまだ言います。

「やっぱりね」

「じゃあどうされますか？止めますか？」

「星を贈るのをかい？」

「はい。それで別のものにしますか？」

「いや、それは止めておこう」

夜の神はそれはしないというのです。

「それはね」

「じゃあ本当にどうするんですか？」

「星は贈るよ」

それは決まっているというのです。夜の神の中では。

「それはね。ただ」

「そのまま贈るのはですか」

「だから何とかしないと」

こう言うのでした。

「それでどうしたらいいかな」

「それじゃあですね」

梟はここでまた知恵を出してきました。夜の神の為に。

第三章

「お花にしたらどうですか？」

「星達をかい」

「はい、お花にしてそのうえで」

「贈ればいいっていうんだね」

「それでどうですか？」

右の翼を手の様に前に出して尋ねます。

「星の花で」

「そうだね。やってみよう」

夜の神も梟のその提案に頷きました。

「それじゃあ」

「はい、そうしましょう」

こうしてでした。夜の神は星達を集めてそれをお花にしたのです。それぞれの色に眩く輝く星達に茎や歯は夜の色です。とても不思議な花達です。

そしてその花達を手にしてです。朝の女神のところに行きます。白く輝く神に眩い笑顔を持っている女神は黒い髪に青い顔の夜の神とは正反対です。服の色も二人は全く違っているのです。

朝の女神は白く輝いています。けれど夜の神のそれはまさに夜の色です。その何もかもが全く違う二人が今互いに向かい合っています。

夜の神の方からでした。

「あの」

「はい、何ですか？」

女神はにこりと笑って彼の言葉に応えました。

「何か私に」

「これを」

こう言っています。おずおずとその花を捧げるのです。

「よかつたらどうぞ」

「あつ、これは」

「星です」

夜の神は言いました。

「星を花にしました」

「星をですか」

「どうでしょうか、これは」

受け取ってもらえるかどうか不安で仕方ありませんでした。けれどここまで来たらと思つてです。意を決してそのお花を女神に差し出しているのです。

女神の動きも言葉も見守ります。するとです。

女神はにこりと笑つて彼に言つてきました。

「有り難うございます」

「有り難う？」

「はい、有り難うございます」

こう言つてです。その花束を受け取つてくれたのです。

そしてその手を持つてです。夜の神に話しました。

「私の朝には星はないですから」

「えっ、ないんですか」

「星があるのは夜だけですよ」

こう言つのです。

「こんな綺麗なものはないんです」

「こんな・・・」

「そうです、ありませんから」

心から喜んでいる顔で、です。夜の神に言つのです。

「有り難うございます、本当に」

「有り難う、ですか」

「そうです。こんなものを貰つて」

こう彼にまた言いました。

「本当に有り難うございます」

「そうですか」

「それでよかったですね」

「はい」

「私の宮殿に来て下さい」

自分から彼を誘ってきました。

「御礼に御馳走でもさせてもらいますので」

「御馳走ですか」

「朝の世界にある色々なものも見せてもらいます」

このことも話すのでした。

「ですから。どうか」

「わかりました。それじゃあ」

こうしてでした。夜の神は朝の女神の宮殿に招かれそれから彼女と楽しい時間を過ごせるようになりました。そしてこのことを梟に話すのでした。

「君のお陰でね」

「上手くいったっていうんですね？」

「うん、そうだよ」

こう梟に話します。

「君のお陰だよ」

「いえいえ、私の手柄じゃありませんよ」

しかし梟は笑顔で夜の神に言います。

「それは」

「いや、君が話してくれなかったらできなかったから」

「したのは神様ですよ」

「僕かい？」

「そうです、神様がですよ」

夜の神にこう話すのでした。

「決めたことですから」

「ううん、そうなのかな」

「はい。何はともあれですね」

「うん」

「この恋、幸せに最後まで進めて下さいね」

「そうさせてもらうよ」

夜の神は梟の言葉に笑顔で頷きました。そうしたのです。夜の神は謙虚な梟に何時までも感謝しました。彼の言葉と心に。

星の花 完

2010・10・4

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2203s/>

星の花

2011年4月4日21時40分発行